

## 高齢者ケアにおける音楽の活用： なぜセクター間の協働が大切なのか？（ノルウェーの事例より）

原 真理子 (Music and Arts in the Milieu)

本講習前半では、高齢者ケアにおける音楽の役割を考える際に参考になる視点を紹介する。音楽経験とケアを結びつけて考える際に参考になるのが、近年の音楽社会学、音楽療法、音楽と健康といった領域の学際的研究で議論されている視点である。その一つに、音楽を聴いたり歌ったり演奏したりという日常生活における音楽行為を、自身の健康を維持する「セルフケア」と捉える音楽社会学の視点がある。さらに、この視点の延長線上にある「音楽アフォーダンス」という社会学の概念によると、音楽が人の情動や身体機能に及ぼす影響は、私たちがその音楽をいかなる場、モノ、他者、そして解釈と結びつけて活用するかによって左右されるという。「セルフケア」としての音楽行為や「音楽アフォーダンス」といった音楽社会学の視点や概念を参考にすることで、音楽を様々な要因と結びつけて心身の健康に良い影響をもたらすケアのための「資源」と捉えることができる。本講習後半では、ノルウェーにおける音楽を用いた高齢者ケアを取り上げ、ミリュートリートメント (miljøbehandling) の資源としての音楽の可能性を議論する。ミリュエ (ノルウェー語では miljø) は日本語では「環境」と訳されることが多いが、もともと地理的および気候的環境に起因する社会システムと文明の設計の原理として使われてきた概念である。ノルウェーでは、ミリュエ (miljø) は、パーソンセンタードケアを実践する上でとても大切な概念であり、経済状況、習慣、制度、人間関係、他者の行動や態度といった個人を取り囲む社会的・文化的環境を意味する。個人を取り巻くミリュエを調整するのが、ミリュートリートメント (miljøbehandling) であり、2017年にはじまった「Leve hele livet! (人生を全うしよう)」という高齢者ケア改革に応じて、高齢者のミリュートリートメントにより一層重点が置かれている。日常的なケアにおける音楽の活用もミリュートリートメントの一貫として捉えられ、音楽療法士、看護師、介護職員、家族、外部ミュージシャン、ボランティアが協働しながらエコロジカル (生態学的) な実践が実現されている。その例として、アスケル自治体で 2018 年に発足された、自治体の六つのケアホームと学校やボランティアセンターといった地域のリソースをつなぎ、地域ボランティアや家族を巻き込んで、音楽の活用と身体活動に力を入れる地域包括型の「アクティブケアモデル」を取り上げる。

### ■プロフィール

兵庫県出身。認知症の祖母の介護に関わった経験から、ケアホームやデイサービスで音楽活動の実践研究を始める。神戸大学大学院在籍中に、日常生活における音楽の役割に着目して音楽実践対象の高齢者に聞き取り調査を実施。その結果を修士論文「高齢者の音楽と音楽行動」にまとめる。2008年より英国留学。英国では、エクセター大学の音楽社会学研究グループ (SocArts) に所属し、アルツハイマー協会が運営する地域音楽活動の実践研究を実施。2013年にエクセター大学にて社会学博士号取得 (博士論文は「We'll Meet Again: Music in Dementia Care」)。2012年にノルウェーに移住後は、オスロを中心に活躍する移民ミュージシャンのキャリア研究、音楽とウェルビーイングの研究に携わる。